

TS（トータル・サティスファクション）を目指して③⑥

ある女性のお話

校長室担当より

これは、野口嘉則さんの「心眼力（サンマーク出版）」という書籍に掲載されていた、実際にあったお話です。

ある駅のホームで一組の老夫婦が10歳くらいの男の子を連れた女性と話をしておられました。その老夫婦はお二人とも耳が遠い状態でいらしたようで、何度も女性に聞き返しておられ、女性は意識的に大きな声で答えていらっしゃいます。とても思いやりにあふれ、同じ説明を何度も繰り返されるときにも終始温かい笑顔で話されていました。最後に、その老夫婦はホームを間違えていることがわかり、移動されました。その後で、女性に男の子がこう言います。

「お母さん、電車を一本乗り過ぎしちゃったね。僕、早く帰りたかったのに。」

この言葉で、電車を乗り過ぎしてでも長い時間に渡って、先ほどの老夫婦に丁寧に対応されていたことがわかります。その後女性と男の子の会話が続きます。

「人間はね、年を取ってくると、耳が遠くなるのよ。今まで聞こえていたものが聞こえなくなっていくのってどんな気持ちだと思う？」

「・・・悲しいかな。」

「そうだね。それにこれからますます聞こえなくなるかもしれないと思うと、不安かもしれないね。あなたはどんな時に悲しくなったり、不安になったりする？」

「うーん、お父さんに怒られた時くらい悲しい。それと・・・友達から仲間外れにされた時。」

さらに男の子はこう続けます。

「あのおじいちゃんとおばあさんも耳が遠くなって悲しいかもね。おかあさん、親切にしてあげてよかったね。僕、電車を一本乗り過ぎしてよかったよ。」

本当に他愛もない、日常的には多くある話かもしれませんが、最後の男の子の言葉にあるとおり、深い学びがとても印象的です。本日はこれに解説を加えることはいたしません。この女性のように、他者を包み込むような懐の深さ、周囲の共感力を引き出し、目には見えない大切なことに時機をとらえて気づかせる力をもって、私たち全員が誰に対しても日常的に接していける学校、そして社会を実現したいと心から思います。（令和5年6月28日）